

[ワウ]

No. 9

2016

9月号

マレー風Wau(ワウ)のように、色鮮やかで誇り高いマレーシアの伝統芸能、ごはん、映画に焦点をあて、専門家がディープにご紹介するフリーペーパー

TAKE FREE

Malaysia Cultural Post

芸能・映画・ごはん... マレーシア文化通信

生き方を表現する 皿の上に

取材・文 Oto Furukawa
(Malaysia Food Net)
写真提供 The Canteen
by Chef Adu

CHEF ADU AMRAN

アドゥ・アムラン シェフ

ジョホール州出身

「The Canteen by Chef Adu」のオーナーシェフ。TV出演、料理本の出版など多方面で活躍。15年間イギリスで料理の腕を磨き、モダン・マレー・アジアという独自の料理をみだす。夢は、読んだ人すべてが美味しく作ることでできる「究極のマレーシア料理本」を制作すること。
<http://www.chefadumran.com>



THE CANTEN BY CHEF ADU

住所: National Textile Museum,
Jalan Sultan Hishamuddin, Kuala Lumpur.
Daily, 9am-6pm

出身地のジョホール料理を中心に、伝統的なマレーシア料理を提供。看板料理は、カレー味のソースを絡めた麺料理「ミー・バンドゥン」、生野菜たっぷりの「ジョホール・ラクサ」、ココナッツミルクごはん「ナシレマ」。ジョホールで人気の燻製バナナチップと西洋のケーキをミックスさせた「燻製バナナブラウニー」も提供。搾りたてのココナッツミルクを使用するなど、食材にとことんこだわっている。カフェスタイルで、価格はRM1.10 ~ RM28とリーズナブル。

<http://www.chefadumran.com/p/the-canteen-by-chef-adu.html>

多くのイギリス人に愛され、多くのマレーシア人が誇りに感じるアドゥ氏の料理。なぜこんなにも、たくさんの人を魅了するのか。その答えは、マルチカルチュラルなアドゥ氏の生き方にありました。

イギリスから始まった

自分のことを「究極のマレーシア人」と表現するアドゥ氏。マレー、中国、インド、インドネシアという、それぞれ異なる文化圏で育った祖父母を持つ、マレーシアの料理家です。

22歳で料理の道を志し、料理学校で学んだあとイギリスへ。それから3年後の2000年、ロンドン橋の近くに開店したレストラン「チャンプル・チャンプル Champor・Champor」のエグゼクティブ・シェフに就任。チャンプル・チャンプルとは、マレーシア語でミックス! 混ぜ混ぜ! という意味。その名のとおり、マレーシアの料理に、西洋や他のアジアの国の調理法を取り入れた新しいスタイルを提供。スパイスや辛味の効いたエキゾチックな味は、多くのイギリス人を魅了しました。

2011年、マレーシアに活動の拠点を移し、テレビ番組の出演や料理本の出版など仕事の幅を広げます。なかでも、料理番組「マスターズシェフ・マレーシア」の審査員出演によりマレーシアを代表するセラフ

シェフへ。2016年4月には、オーナーシェフとして「キャンティーン by シェフアドゥ」をクアラルンプールに開店。イギリス人に愛されたアドゥ氏の料理が、母国マレーシアでも味わえるようになりました。

定義にしばられない

アドゥ氏の料理の魅力。それは、ジャンルや固定観念にとらわれない自由な発想にあります。たとえば、日本のだしを「繊細で奥深い味わいが、料理をエレガントに仕上げてくれる」と考え、あらゆるノンベジタリアン料理の隠し味として使用。また、醤油のかわりに日本の味噌を使い、味に深み出すこともあるそうです。

この発想の原点は、アドゥ氏の子どもの時代の食卓にありました。「わが家の食卓には、普段からインド料理、中国料理、マレー料理、ジャワ料理といった様々な料理が並んでいた。中国系の祖母は、ジャワ民族の養父母に育てられていて、ジャワ料理も得意だったんだ」。

たとえば、ある日の夕飯はマレーシアで人気の「アッサムベダス(酸味と辛味のある魚スープ)」、その翌日はインドネシアでよく食べられている「サンバルゴレン・ジャワ(豆腐やテンペなどを炒めたもの)」。民族を超えて、国を超えて、一般に語られる食文化という概念も飛び越えて、いろんなジャンルの料理が、ひとつのテーブルの上で食事を組み立てることは、アドゥ氏にとってはごく普通のことなのです。

料理という名の芸術作品

アドゥ氏は「料理はアート表現」と語ります。それは画家が絵を描くように、写真家が写真を撮るように、アドゥ氏は自分の世界観を皿の上で表現するのです。料理人として喜びを感じる瞬間は?と聞くと「空になった皿を見るとき」と。「おいしかった。心地よい時間が過ごせた。思い出に刻まれた。そんなふうに、食べてくれた人の心を動かしたことが、何よりもうれし」と付け足します。



ミー・バンドゥン(Mee Bandung)。魚介など具だくさんの麺料理。スパイスのきいたグレービーソースは、辛さひかえめ。ほんのり甘みもあり、日本人の舌にもよく合う。

「僕は、じぶんで思い描いたとおりの人生を歩んでいる極めて幸運な人物」というアドゥ氏は、最後にこうメッセージをくれました。「あなたの心を動かしているものは何か?あなたを成長させてくれるものは何か?あなたを変えてくれるものは何か?それをシンプルに愛すること。それが僕のモットーです。」どう生きるべきかはすべて自分が知っているのです。



⑤



④



③



②

黒と白の世界に込められたメッセージ。 キナバル山の麓から

① リゾ・レオン氏



取材・文・写真(人物・作品) Aki Uehara
(Mutiaras Arts Production)

写真提供 Pangrok Sulap

グループの設立
パンクロック音楽イベントで出会った仲間たちが、2010年頃から地域でボランティア活動

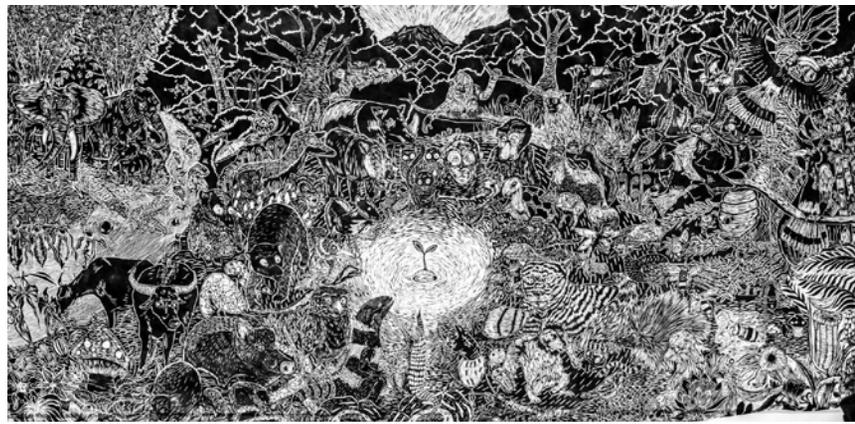
中でも一際目を引いたのが、約1.2m×2.4mの大型の二作品。一枚目は熱帯雨林で「最後の苗木」を愛でる様々な動物たちを写真⑥。二枚目は人間によって伐採されたジャングルにいる一人の人間に葉っぱを掲げ動物たちが守ろうとしている「人間に対する動物の愛」という作品を写真⑦。まずその動物たちの細やかな描写に驚き、そして人間が森林伐採を続けるジャングルから世界に向けて発信される強いメッセージに立ちすくみました。

活動を紹介してくれたのは、グループの中心人物リゾ・レオン(Rizo Leon)氏(写真①)。彼らの版画作品の強烈なインパクトに私は釘付けになり、二つの作品とじっくり向き合いました。

サバ州の民族の衣装とビーズ細工を身にまとった女性の上写真②には「戦争ではなくビーズ細工を作ろう」という言葉。山を背景に水牛に乗った村人たち(写真③)、多民族国家であるマレーシアを表すような絵(写真④)には「違いを尊重しよう」とのメッセージ。そして、彼らの活動の根幹となっている「DIA精神」を表す「買わずに自分たちで作ろう」という作品(写真⑤)ではミシンや工具がモチーフになっています。

木版画アートコレクティブ パンクロック・スラップ Pangrok Sulap

ボルネオ島の雄大なキナバル山の麓で暮らす先住民の美術集団「パンクロック・スラップ」。木版画作品を通して様々なメッセージを発信しています。彼らが守りたい村の伝統文化、熱帯雨林という生活環境。ユーモアも込められた作品の力強さに驚きます。



⑥ 自然の仲間を愛でる (Merai Sahabat Alam, 2014)
⑦ 人間に対する動物の愛 (Kasih Binatang pada Manusia, 2015)
両作品ともサバ州セピロクのオランウータン保護施設で開催された Festival of Wildlife の際に作成されたものです。

⑧ ワークショップの様子



木版画というツール

木版画はサバ州の伝統文化ではありませんが、最近東南アジアのアート活動家たちの表現の手段として、木版画を使う動きがあるようです。パンクロック・スラップは、インドネシアで活動をしているパンク音楽グループ「タリン・パディ (Taring Padi)」などから影響を受け、彼らから版画の技術を学びつつ、独自のスタイルを築いてきたといえます。

創造力豊かな若者たちを育てたい
学校、孤児院、少年院、大学などでワークショップも開催。次世代を担う若者たちの心を開き、インスピレーションを与え、アクティブで創造力豊かな若者を育てることが大切です。

※2016年2月、成蹊大学アジア太平洋研究センターにて開催されたパンクロック・スラップの木版画展示会のため来日したリゾ・レオン氏にインタビューしました。

とを考え、教育の環としてTシャツや、版画の作成と一緒に手掛けています(写真⑧)。

プナン地方のダム建設反対の村人たちと版画でバナーを作って、村人の声を外の世界に伝える運動にも参加。版画を通して、村人たちの活動を活性化させようとしています。

ワークショップでは、みんなで足踏みしながら版画を刷ります。傍らでメンバーが音楽を演奏し、みんなで楽しみながら作業をします。そこで歌うオリジナルの歌の歌詞も社会の様々な問題をテーマにしているそうです。

「音楽を演奏することでみんなを一つにまとめ、上も下もない」というリゾも、音楽が大好き、ギターを弾いたり、歌ったり、やっぱりロックな人なのです。

パンクロック・スラップは木版画というツールを使っていますが、メッセージを伝えることが大事なのであって、そのツールに縛られ過ぎないことも大事だといえます。また、「お金よりも知識が大事。知識は無償で若者に与える」という理念で、彼らの活動資金源はTシャツや手作り本の販売から得られる限られた収入です。「贅沢をせず、足るを知る」と言われて、私も日常を振り返りました。



ヤスミン映画ファン必見。 行定勲監督作品に シャリファ・アマニ登場!

第29回東京国際映画祭上映「アジア三面鏡」
行定勲監督作品「鳩 Pigeon」



取材・文 Rie Takatsuka (株式会社 ODD PICTURES)
写真提供 国際交流基金アジアセンター、東京国際映画祭

2016年の東京国際映画祭で上映される、国際交流基金アジアセンター×東京国際映画祭の共同製作映画『アジア三面鏡』。日本とアジアの国の人々の交流テーマにした3つの短編からなるオムニバス映画で、3作品のうちの一つが、マレーシアを舞台にした行定勲監督の「鳩 Pigeon」です。マレーシアでの撮影について、行定監督にお話を伺いました。



ペナンを舞台に マレーシアンクルーで撮影

行定勲監督といえば、「世界の中心で、愛をさけぶ」他で、日本アカデミー賞も受賞されている日本を代表する映画監督ですが、「鳩 Pigeon」は、マレーシアのインディーズ映画のクルーとともにペナンで撮影されました。マレーシアを舞台にしたのはどういった経緯だったのでしょうか。

「アジア三面鏡の話が来たときに思い出したのが、祖父の兄弟たちが、マレーシア戦線で戻ってこなかったという出来事でした。祖父は、一度マレーシアに行ってみたくて言っていたけど叶わず他界。津川雅彦さん演じる主人公の老人には、そんな祖父を重ねました。さらに、ここ最近マレーシアをリタイア後の癒しの地として選ぶ人も多く聞きましました。そんな文化的背景を元に老人が主人公のマレーシアが舞台の作品にしたいんです。」

シャリファ・アマニ登場

「鳩 Pigeon」には、W A U 創刊号でもご紹介したマレーシア女優、シャリファ・アマニさんが参加しています。2015年に開催された「マレーシア映画ウィーク」の際に来日し、その聡明かつキュートな笑顔に多くのファンが魅了されました。行定監督との出会いはどんな感じだったのでしょうか。

ヤスミン監督の「細い目」の少女オーキッドのイメージをメイド役に考えていたけれど、実際の彼女に会ったら、当然、大人になっていて、でも、彼女から発せられる特別な女優が持っているオーラと、インディペンデントで国際的なクリエイションの感覚を持っている人だと感じました。それで、こちらが年齢の設定を変えて参加してもらったんです。メイドの名前は、当初、役のイメージでオーキッドだったのですが、彼女は、オーキッドはヤスミンの作品で生きていくからと、別の名前を提案してきました。その名前は「ヤスミン」。彼女の口からそう発せられたときは感動しました。

「鳩 Pigeon」は裏切らず

タイトルにもなっている「鳩 Pigeon」ですが、今回津川さん演じる頑固な老人、道三郎がマレーシアの屋敷で鳩を飼うのです。

「僕は子供の頃、レース鳩を飼っていたことがあるんです。よく訓練された鳩は、裏切らない。信じていけば鳩は絶対戻ってくる。道三郎は、日本の家族と離れて心を閉ざし、

鳩しか信じられない。鳩は、平和のシンボルでもあるし、日本的でもある。信じる拠り所の表現として登場させました。」

マレーシアと日本の共同制作

「アジア三面鏡」は、「アジアで共に生きる (Live together in Asia)」をテーマに日本を含むアジアの監督3名が描く、共同製作プロジェクト。今回、日本、カンボジア、フィリピン、そしてマレーシアの四カ国で撮影を行ったオムニバス映画となっています。

異国間の共同製作ですから、想定外のことも多かったですよ。鳩はうまく飛ばないし(笑)。でも、計画通り、きっちりやりたいなら日本で撮ればいいんです。東南アジアに慣れてない津川さんに頑張ってもらい、コミュニケーションも不十分な撮影クルーとの間で、一種賭けでもありました。長編1本撮れるくらいのプロセスがありました。

アマニさんは、津川さん、永瀬さんの演技に感銘を受けていました。津川さんは、役作りで、カメラが回っていない時でもアマニさんに、役柄と同じ冷たいアプローチをしていたため、彼女も途中で心が折れそうになっていた事もありましたが、撮影後半は、津川さんもホッとしたのか二人とも仲良くなりました。また、永瀬さんに対しては、彼が醸し出している演技だけではない人間性のようなものがむき出しになっている部分や、演技の二つに、すごい俳優さんだと感銘を受けていました。ヤスミン監督作品のオーキッドと、日本を代表する俳優が同じフレームの中にいる。映画の歴史があるとすれば、ささやかですが両者が交わったこれこそが歴史的瞬間、こういうことがあるから映画は面白いんです。この「アジア三面鏡」というプロジェクトがなかったら実現しなかったショットだと思えます。これが、異国で映画を撮るということ、「アジア三面鏡」の目指している意義だったと思います。

取材を終えて

ヤスミン映画ファンにはおなじみのシャリファ・アマニさん。ヤスミン監督が亡くなる直前に彼女がヒロインの日本を舞台にした映画を計画中だったこともあり、彼女の中で日本との共同製作には特別な思いがあるに違いありません。「アジア三面鏡」は、第29回東京国際映画祭で上映されます。(日程、上映スケジュールは後日WCOで発表)



「アジア三面鏡」

国際交流基金アジアセンター×東京国際映画祭co-produce アジア・オムニバス映画製作シリーズ。「アジアで共に生きる (Live together in Asia)」を共通のテーマに、プリランテ・メンドーサ(フィリピン)、行定勲(日本)、ソト・フォーリーカー(カンボジア)の三カ国の監督によるオムニバス。第29回東京国際映画祭にてワールドプレミア上映した後、世界各国の主要映画祭での上映を目指す。東京国際映画祭は2016年10月25日(火)~11月3日(木・祝)開催。「アジア三面鏡」の上映スケジュールは東京国際映画祭のウェブサイトなどで発表。

「鳩 Pigeon」あらすじ

認知症気味の老人、道三郎は、息子の用意したメイド付きのマレーシアの屋敷に家族と離れて暮らしている。道三郎はメイドの若いマレーシア人女性ヤスミンにも心を閉ざしているが、少しずつ二人は心を通わせていく。主演の老人役に津川雅彦さん。マレーシア人メイド役は故ヤスミン・アフマド監督作品のオーキッド役で著名な、シャリファ・アマニさん。老人の息子役として永瀬正敏さんが出演します。

YUKISADA ISAO

行定勲

1968年、熊本県出身。『ひまわり』(2000)で第5回釜山国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞。『GO』(2001)では第25回日本アカデミー賞最優秀監督賞を始め、数々の映画賞を受賞。『世界の中心で、愛をさけぶ』(2004)は観客動員620万人、興行収入85億円の大ヒットを記録。以降、『北の零年』(2005)、『パレード』(2010、第60回ベルリン国際映画祭パノラマ部門・国際批評家連盟賞受賞)。釜山国際映画祭のプロジェクトで製作されたオムニバス映画『カメラ』(2011)の中の一作『kamome』を監督。公開待機作は、日活ロマンポルノ『ジムノペディに乱れる』(今秋公開)と『ナラタージョ』(来秋公開予定)など。





コンビニで爆買い。ときには日本人彼女も連れて帰国する

来日20年の長い歴史のなかで大ヒットしたお土産は——長距離運転するパパに超辛口ミントガム「BLACK★BLACK」/掃除大好きママに掃除用スポンジ「激落ちくん」/靴下コレクション中の妹に5本指ソックス/ジャンクフード大好き弟にインスタントラーメン/近所のおばさんに軽量折りたたみ傘/親戚に老若男女問わず配ることができるお煎餅の数々——いずれも近年では地元に進出したAEONモールで手に入るようになったそうですが(笑)。



家族に喜ばれた商品



家族団欒する陳家の原風景に鉄板あり

僕のパパは陶磁器の大手メーカーに勤めていて、1977年に日本に3ヶ月間海外研修として派遣されました。そのときに世話してくれた派遣先の方々の優しさが陳家の親日のルーツだと思われまふ。パパが電気ホットプレートで鉄板料理を振る舞いながら当時の思い出話をするのが、陳家のいつもの食事風景。日本に留学して「パパのあれは日本料理ちゃうん!」と気づきましたが、パパ流のほうがおいしかったかもしれません。いちおう、お土産にお好み焼き粉など本場の素材を買って帰るようにします。

THE MANGA 陳家物語

お土産編

マンガ WindzTan 文・構成 TANJC

日本と縁が深いマレーシア華人一家を、兄弟ふたりがタックを組んでマンガで綴る連載「陳家物語」。第3回は、これまで日本からマレーシアに持ち帰ったお土産の数々をご紹介します。

Windz Tan
陳維哲



漫画家。88年生まれ。09年来日。文星芸術大学マンガ専攻にてはてつや氏(代表作「あしたのジョー」)のもとで学んだのち、ピストロの調理補助として修業・料理研究。料理漫画以外もファンタジーから戦争、ギャグ、少女マンガまで。

TANJC
陳維錚



デザイナー、メディアアート作家、大学講師。12才離れた実兄だが、Windzと瓜二つ。96年来日。東京→山形→京都。舞台撮影から、映画VFX、グラフィックデザイン、WEBまでマルチにこなす。WAWは創刊からデザイン担当。



空港での送り迎えが趣味のパパ。空港まで片道4時間の長距離運転をねぎらおうと思って選んだ眠気覚ましガムのほかに、鼻毛カッターも喜ばれました。あんまりにもウケたので、昔ながらの手動のものから高価なハイテク電動カッターまでいろいろ買い揃えてプレゼント。私のせめての親孝行でした。



バックミラーで鼻毛カットするパパと、助手席で爆睡するママ

20年のお土産購入の歴史の中で、失敗したお土産といえば、牡丹など着物の花柄を取り入れた粋な「和風」シャツです。地元の中国系お婆ちゃんたちの普段着に酷似したそのシャツをらった弟が困惑した顔を思い出すたびに反省します…これはもう、私の「日本人化」なのでしょうか。

Hati Malaysia 監修レシピ動画 YouTubeで公開中!

アヤムを使って本格アジア料理 レシピ動画を見て作ろう!

南国ごはんナシレマ、ニョナチキンカレー、ココナッツデザートなどがお家でカンタンに作れます!

マレーシア旅行専門店

動物園飼育体験・キャビンクルー体験・教育プログラムなど様々な目的型ツアーをご提案!

お客様のご希望に合わせてオリジナル旅程アレンジが可能です!

応援します! 目的のある旅 パーパスジャパン

東京本社 03-5775-1919
大阪営業所 06-6456-5892
http://www.purposejapan.com

マレーシアリゾートクラブ

http://mrcj.jp

マレーシア、ボルネオ地域専門旅行会社

(株)エムアールシージャパン/東京都知事登録旅行業 3-5248号

マレーシアごはんの会

http://www.malaysiafoodnet.com

日本でマレーシアごはんを楽しむ会

ムティアラ・アーツ・プロダクション

http://mutiara-arts-production.com

文化交流事業の企画制作、通訳・翻訳業

オッドピクチャーズ

http://odd-pictures.asia

国内外映像映画制作・マレーシアロケ

編集後記

古川音
Oto Furukawa

ライター。首都クアラルンプールに4年滞在した経験を活かし、「All About」や「CREA」ウェブサイトにてマレーシアの記事を執筆。また「マレーシアごはんの会」にてイベントや料理教室を主催。古川音 HP <http://www.otofurukawa.com> マレーシアごはんの会 HP <http://www.malaysiafoodnet.com>

上原 亜季
Aki Uehara

ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。AFS生として一年間マレーシアの高校に留学。Universiti Sains Malaysiaの大学院にてマレーシアの伝統芸能の研究を行い、修士号取得。国際文化会館勤務を経て、現職。東南アジア芸能コーディネーター、イベント企画・制作、記事執筆、マレー語通訳・翻訳。 <http://mutiara-arts-production.com>

高塚 利恵
Rie Takatsuka

映像プロダクション、株式会社オッドピクチャーズ代表。インディペンデント映画プロデューサー。日本国内にて映像によるプロモーションの企画、撮影。マレーシアの映像制作プロダクション(ODD PICTURES MALAYSIA)と連携した映像・映画製作など。HP <http://odd-pictures.asia>